

『青い麦』における女性像を めぐって

—古典作品の現代化

山田志生 博士課程後期 1年

キーワード：コレット、ダフニスとクロエー、ポールとヴィルジニー、古典作品、青い麦、女性表象、子ども、幼年時代、キャリア

はじめに

フランス文学史を代表する作家たちの中には、他の作品への関心からそれらを作家自身の作品の一部に用いたり、オマージュを創作したりと様々な試みを実践した作品が多数存在する。なかでも、ベルナルダン・ド・サン＝ピエールの『ポールとヴィルジニー』(*Paul et Virginie*, 1788) はこれまでに最も繰り返し扱われてきた作品のひとつとして挙げることができるだろう。例えば、ジョルジュ・サンドには創作活動に至るほどの大きな影響を与え、バルザックやフロベールは作中に引用した。では、今日改めて20世紀の作家を見渡すとき、多くの作家を魅了した『ポールとヴィルジニー』をはじめとする古典作品の影響を見出すことは可能だろうか。

19世紀から20世紀にかけて、文学、演劇、評論、ジャーナリズム、ルポルタージュ、化粧品やグッズの販売など多岐にわたる分野で活躍した女性作家シドニー＝ガブリエル・コレット (*Sidonie-Gabrielle Colette*, 1873-1954) は、『シェリ』(*Chéri*, 1920) を発表するまで通俗的な作家と評価されてきたことは広く知られている。『シェリ』によって彼女の文学的テーマや筆致の巧みさが世間に認められたのである。しかし、数々の賞¹⁾ を受賞し、「通俗的な作家」から1920年を通じて「文化的な作家」へ変化したとはいえ、彼女の名を文学史の中に見かけるときには、彼女自身の人生におけるスキャンダラスな側面に光を当てられることが多い。ところが、コレットの小説もまた、彼女が愛読したバルザック、フロベール、サンドのように伝統的な作品への関心を思わせる。それが、1923年に出版された『青い麦』(*Le Blé en herbe*) である。これは、思春期にある幼馴染みの少年少女と年上の女性とが三角関係を織り成す物語であるが、実のところ、ロンゴスの『ダフニスとクロエー』を土台としている。そのことは、この物語が小説として出版されるまでの経緯を辿ることで明らかになるだろう。当初、ル・マタン誌での連載小説であった『青い麦』は、断章の形式で執筆され、各章には題

名がついていた。第4章には『ダフニスとクロエー』を暗示する「ダフニス Daphnis」という題がつけられ、続く第5章では実際に、フィリップとダフニスとが対比されている。このことから、いわば、コレットは彼女の力量をもって、古典作品『ダフニスとクロエー』（2世紀末～3世紀初め頃）を『青い麦』へと現代風に書き換えたといえる²⁾のだが、さらに、この物語は他の作品をも下敷きにしていることを暗示させる。それが、前述した多くの作家が扱った『ポールとヴィルジニー』だ。この3つの作品の男性主人公フィリップが女性主人公ヴァンカに投げかけるイメージや物語の舞台設定が、この物語を想起させるのだ。『ポールとヴィルジニー』もまた、おさななじみの少年少女の恋を描いた作品であり、人目につかない島を舞台に展開する物語であることから、読者は『青い麦』の中にそれらを容易に思い浮かべることができるのではないだろうか。

さて、これらの作品は共通、あるいは類似した物語設定を持っている。しかし、とりわけ『青い麦』は、思春期の少年少女の官能や性の目覚めを描いた小説であるが、この物語に描かれているのは思春期に抱くセクシュアリティの問題だけではないように思われる。ひとりの人間が子どもから大人へ、迷いや葛藤を抱えながら成長する過程を実に緻密に、詳細に描いているのだ。そこで、『青い麦』と擬古典小説『ダフニスとクロエー』、そして19世紀のベストセラーとなった『ポールとヴィルジニー』を比較するとき、『青い麦』の中に新たな人物像を見出すことができるのではないだろうか。なかでも、誘惑者となる年上の女性ダルレー夫人と幼馴染みの少女ヴァンカに焦点を当てることで、伝統的な枠組み、あるいは女性像からの逸脱を発見することができるのではないだろうか。フランス文学を代表する古典作品とコレット作品とを照らし合わせることで、コレットが描いた類似、そして逸脱を検討していきたい。

1. 下敷きとしての古典作品『ダフニスとクロエー』

まず、この『青い麦』という作品の位置づけはどのようなものだろうか。この小説は、コレットと恋仲であった義理の息子ベルトラン・ド・ジュヴ

ネルによれば、彼が夏のあいだ何年かにわたってモン＝ドールの避暑地で経験した淡い恋の記憶を起源として、コレットがロズヴァンの別荘地で書き上げたものである。コレットとしてはコメディ・フランセーズのための一幕物の劇を想定していたのだが、この物語もまた、しばしば自伝的小説として受け取られることが多い。それはベルトランが「ダルレー」という名の通りにアパルトマンをかまえており、コレットがしばしばそこへ足を運んでいたことが原因だろう。これについては、コレットの一生をまとめたロットマンも、ダルレー夫人の存在は意味深長なものであると述べている³⁾。では、『青い麦』と『ダフニスとクロエー』の重要な共通点となるこの年上の女性はどのような性質を持ち、男性主人公に対してどのような影響を与えるかを考察する。

1-1. 性愛の伝道師の紹介

まず、『青い麦』における『ダフニスとクロエー』の踏襲はどのように表されるだろうか。『青い麦』において、冒頭で寝そべるフィリップはギリシア彫刻のように描かれ、主人公の少年少女とその家族以外にはほとんど人物が登場しない。ふたつの家族は都会の生活を忘れさせる、多くの自然と動植物に囲まれた島で夏を過ごす。これらの要素は、ほとんど『ダフニスとクロエー』に呼応するものである。読者は男性の描写、自然描写、孤島といったモチーフによって時代を超越し、古典作品を想起するのだ。しかし、この二作品の重複するイメージは、牧歌的な舞台描写だけではない。前章でも取り上げた第5章「悲劇 Dramas」の以下の描写から、さらに読解を深めることができるだろう。

愛は、彼らより先に育っていた。愛によって、幼年時代の彼らは魔法をかけられたかのように楽しく過ごしていたが、思春期の彼らには曖昧な友情を保っていた。ダフニスほど無知ではないにせよ、フィリップはヴァンカのことを兄弟のように尊んだり邪険にしたりもする。しかし、ヴァンカことは東洋風にいえば、まるで生まれながらの許婚のように大切にしているのだった⁴⁾。(下線は筆者による)

ここでは、恋愛や性について無知なダフニスのように、フィリップがあまりに既知の存在である幼馴染みの少女をどのように扱えばよいか、また、思春期における恋愛をどのように進めてゆけばよいか、という点について知識が乏しい様子が描かれる。そして、このふたりの男性主人公が比較対象にあることだけでなく、フィリップとヴァンカの関係性をも見ることができるだろう。引用下線部の原文「on les eût mariés dès le berceau」は、まるで生まれた瞬間からふたりの男女が結ばれる運命を背負っているかのようだ。『ダフニスとクロエ』の少年少女は様々な外的困難に見舞われながらも、物語の結末では結ばれることが約束されている。まるで、初めから決められた結末にむかって収束していく古典作品を暗示するのである。

さて、この二作品の最大の共通項は、主人公たちが互いに愛と性的魅力を感じながらもそれを実行する方法がわからずに進むことができないという点だ。少年少女はどのように関係を進めさせるのだろうか。それは、快楽を手ほどきする年上の女性の介入によってである。これは、『青い麦』と『ダフニスとクロエ』の両作品においてとりわけ顕著に共通し、物語の重要な展開を生み出す出来事である。『ダフニスとクロエ』における介入者はリュカイニオンという女で、秘密裏に、男性主人公ダフニスに快楽の手段を教える。この女は町から嫁いできて、年若い美貌と田舎にはめずらしい垢抜けた容姿を持つのだが、『青い麦』の中でフィリップにとっての性愛の伝道師となるダルレー夫人もまた、美しい容姿を持ち、彼らの避暑地には馴染みのない外部からやって来た女なのである。以下に引用する出逢いの場面から、彼女が外部からやって来た人間であることを読み取ることができるだろう。

- 「失礼、ムッシュー…運転手が道を間違えたんです。せっかく注意するように言ったのに…この道は小道になって海に出るのよね。」
- 「そうです、マダム。海藻取りに行く道です。」
- 「カイソウトリ。その道までどのくらいの距離なんでしょう。」[…]
- 「マダム、海藻取りというのは、カイソウトリじゃなくて、つまり…海藻を取るってことです。』⁵⁾

これは道に迷い込んだダルレー夫人が偶然に遭遇したフィリップに正しい道へ戻る手順を尋ねる場面だが、この土地を知り尽くしているフィリップは「海藻を取ることができる道」と説明する。しかし、ダルレー夫人はこれを「カイツトリ」という道の名称だと誤解するのだ。この勘違いから、現地の人間のように土地勘のあるフィリップとは対照的に、彼女が避暑地の外からやって来た人間であることが明白になるのだ。このように、性愛についてほとんど無知な男性主人公たち、すなわちダフニスとフィリップは、外部から現れた年上の女性からその方法を教わるのである。そして、この女伝道師たちは女性主人公に直接的に接触することはなく、常に男性主人公側に働きかけるのである。

しかし、この二つの物語は完全に一致するわけではない。というのも、『ダフニスとクロエー』のリュカイニオンは性愛の方法を施すやいなや、二度と少年少女に介入することはない。まるで、彼女は物語において、若い男性に性愛を教え込む役割のみを課せられていて、目的を果たしてしまうと彼女の役目が終了するかのようである。それに対し、『青い麦』のダルレー夫人は性愛の伝道師のみに留まらない。彼女はフィリップの回想によって繰り返し登場し、彼に対して圧倒的な影響力を持つ。フィリップは彼女の残した記憶によって精神と身体ともに様々な異常な反応を引き起こすのである⁶⁾。では、このダルレー夫人は、性愛の伝道師以外にどのような役割を持つのだろうか。彼女に対して抱くフィリップのイメージから検討していきたい。

1-2. 『青い麦』にみるファム・ファタル

『ダフニスとクロエー』のリュカイニオンが一時的な誘惑者であったのに対し、『青い麦』のダルレー夫人はフィリップに対して出逢いから別れの後まで、圧倒的な影響力を持ち続ける。では、この女性は、彼によってどのように描写されるのだろうか。

ダルレー夫人はフィリップによって32歳か33歳くらいと推定され、彼はこの年上の女性に対して女性への美しさや憧れというよりも、むしろ警戒心や畏れともいえる感情を抱く。まるでこれから彼の身に起こる出来事

を察知しているかのようだ。ダルレー夫人が滞在する屋敷はケル・アンナと呼ばれるのだが、第8章「l'antre 洞窟」で初めて彼がケル・アンナを訪問する場面から、彼の心情を読み取ることができるだろう。

彼は家に入った。光とハエが入らないように閉め切られた真っ暗な部屋に入り込むにつれて、うろたえてしまった。錠戸とカーテンが引かれているために低くなった気温のせいで、彼は息切れしてしまった。彼は柔らかい家具につまづいて、クッションの上に倒れこんだ。すると、彼は悪魔のような小さな笑い声を聞いたが、それがどこから聞こえてくるのかわからず、不安で危うく泣いてしまうところだった⁷⁾。

この章の題名「洞窟」という言葉が暗示するように、彼女の屋敷はまるで悪魔の住処のように描かれる。そして、フィリップはダルレー夫人について回想するときには「魔女」、「悪魔」、「女主人」といった言葉を用いる。彼はダルレー夫人を自分には敵わない存在として認識し、服従にすら近い感情を抱くのである。さらに、フィリップはダルレー夫人と関わることで心身ともに異常な反応を引き起こしていくのだが、たとえば、以下の引用は初めての密会についての言及である。

あの訪問は、どんな快樂ももたらしてはくれなかった。鉢で焚かれていた香の回想で一瞬、食欲は麻痺させられてしまうし、彼の神経に錯乱を起こさせる⁸⁾。

フィリップにとって彼女との密会は良い思い出ではないどころか、彼の食欲や神経といった感覚に支障をきたしてしまう。そして、快樂すらも否定するにも関わらず、夜になるとフィリップは繰り返しケル・アンナへと出掛けていくのだ。

フィリップがケル・アンナを何度も訪れる目的が快樂のためだけでないとすれば、なぜ彼は繰り返しダルレー夫人を求めるのだろうか。まるで、「魔女」の持つ魔力によって、彼の意志とは裏腹に彼女の元へ引き付けられ

ているかのようにないだろうか。このように抗い難い魅力によって男性主人公を誘惑し、「魔女」や「悪魔」、「女主人」という言葉で形容されるダルレー夫人から読者が思い浮かべるのは、フランス文学において繰り返し題材とされてきたファム・ファタルの存在である。順当にいけばパリの大学生になるはずのフィリップは、得体の知れない女性に惹かれる気持ちと恐怖といった相反する感情を抱く。常に彼の心は神聖な存在であるヴァンカにありながらも、この白いドレスを纏った魔性の女に心を奪われることで身体に異常をきたし、精神を錯乱させていくのだ。フランス文学史における古典作品では男性主人公が主に地位の喪失や両親からの勘当という点で破滅していくのに対し、フィリップは自分自身の喪失という点において、読者に破滅を予感させるのである。ダルレー夫人は、彼にとって文学作品におけるファム・ファタル的な女性として映るのである。

1-3. 空間の対立

ダルレー夫人がファム・ファタル的な女性であるとすれば、彼女によって導かれる「破滅」はフィリップの身体や精神だけでなく、彼の「日常」という時間にまで及んでいるようである。語り手は、彼がヴァンカや家族と過ごす時間と、ヴァンカたちは知らない、少なくとも隠し通せていると思っているダルレー夫人との時間を以下のように語る。

夢も、悪夢でさえも、現実の生活に属してはいなかった。冷たい闇と鈍い赤、黒と金のビロードで豊かに彩られたあの悪夢がフィルの生活を侵食していた。

そして一日のうちの普通の時間が、部分日食のように縮められていった⁹⁾。

語り手は、ヴァンカや家族と別荘で過ごす日常が現実世界であるのに対し、ケル・アンナでの出来事は夢、すなわち非現実世界として切り分ける。彼が次第に非現実世界に蝕まれていく様を指摘するのだ。そして、ケル・アンナから別荘へ戻る前に、いつも別荘の前にある芝生で回想や独白をする

のだが、フィリップはこの場所を「避難所」と呼ぶ。彼自身もまた、ふたつの空間を行き来する間のある地点を「避難所」と名付け、ケル・アンナと別荘の境界を明確にすることで、非現実と現実の世界をはっきりと区別しているように思われるのである。

このように空間を区分することにはどのような意味があるのだろうか。これについては以下のシャレールの指摘が参考になるだろう。

コレットが主人公たちの空間の状況を考え出すのは、劇作家としてなのだ。彼女が描写しようとした場所に関する美的価値には、ほとんど常に機能的な焦点（空間が対立を際立たせ、具体化する。そしてこれが作るものが行動を構成する要素になる）と、意味論的な焦点（空間が主人公を示す、あるいは象徴する一人格や、環境、心理的状态）が付け加えられている¹⁰⁾。

コレットが配置する空間は装飾としてではなく、物語における対立を明確にし、人物の行動をも決定する。さらに、空間それ自体が人物を語り、補足・説明する機能があるのだ。そして、シャレールは『青い麦』の空間についても言及している。

つまり、両親とヴァンカが待つ別荘とケル・アンナという二つの空間は、フィルの精神における対立を表しているといえるだろう。つまり、大人への成長と子ども時代との葛藤である¹¹⁾。

たしかに、フィリップやヴァンカは早く大人になりたいと望む一方で、家族に対しては子どもらしくいることを過剰に意識している。たとえば、両親の友人の家へテニスをしに行く日には「無邪気に笑う子ども」を演じるし、夕食の席では「子どもらしく」明るく振舞う。彼らの子どもらしさが意図的に行われることによって、実際には彼らが、両親が思うよりも遥に大人へと成長しつつあることを強調するのである。つまり、彼らは子供を装う大人であるといえるだろう。現実世界においてフィリップとヴァンカ

は着実に大人へと向かっているのだ。

ところが、別荘とケル・アンナという二つの空間をもつフィリップには、家族と過ごす日常的空間とは別に、ダルレー夫人を象徴する非日常的な空間もまた、存在する。大人へと成長する日常と対立するこの空間がやはり「子どもでいること」と結びついていることは、ダルレー夫人が避暑地を去ったあとに彼が抱く独白によって、改めて確認することができる。

《ああ…彼女は行ってしまった… […] 彼女がほくに与えてくれたものは、何て呼べばいいんだろう。名前なんてない。彼女はほくに与えてくれた。クリスマスを楽しめる、子どもという存在であることを止めてしまった時から、彼女だけがほくに与えてくれた¹²⁾。》

ダルレー夫人は彼に非日常を与える存在であるが、その非日常においてフィリップは成長を止め、子どもで居続けることが可能になるといえるだろう。さらに、そのことはダルレー夫人の視点からも伺うことができる。というのも、ダルレー夫人は彼のことを「坊や petit」と呼び、「フィリップ」という固有の名前を剥奪する。

『青い麦』において、ダルレー夫人は性愛の伝道師という枠組みを超え、男性を破滅へと導くファム・ファタルとしての女性像を体現する。そして、コレットの空間配置が加わることによって、男性が現実から逃避することを可能にし、子どもで居続けることのできる居場所としても機能するのである。

2. 19世紀的女性像からの逸脱

フィリップはダルレー夫人に惹かれながらも、彼の恋心は常にヴァンカの側にあるようだ。とくに注目に値するのは、ふたりの女性の間で揺れ動くフィリップだが、彼が彼女たちに抱く女性像はまったく異なるものであるという点だ。本章では古典作品にみる女性像を参照しながら、フィリップがヴァンカに投げかけるイメージを検討していく。

2-1. 『ポールとヴィルジニー』

『青い麦』には動植物や生物の名称が数多く登場する。それは一般的なもののからあまり知られていないものまで多岐に渡る¹³⁾。たしかにコレットは、自然を愛した母シドの影響によってか、動植物を愛好していたことで有名である。実際に、文学作品においても動植物や自然を多様に、かつ詳細に描いてきた。しかし、ここでは自然を単に物語の装飾としてみなすのではなく、自然と人間を区別するような描写があることに注目したい。以下に、第5章「悲劇 Dramas」の冒頭を引用する。

八月の大潮が雨を運んできたせいで、窓は雨で満たされていた。大地はそこで、砂のまじった野原が境界となって終わっている。もしかた風が吹きつけたら、もしかた泡が平行に漂う耕された灰色の畑のような海が盛り上がったら、家はおそらくノアの箱舟のように漂うことになるだろう。しかし、[...] フィルとヴァンカは、草地の端が乗り越えられてしまうことはないと知っていた。幼い頃の彼らは、毎年、人間界にむしばまれた縁で、石罅のように白く泡立って細長く連なった波が無力に踊っているように押し引きするのを見てばかりにしていたのだった¹⁴⁾。(下線は筆者による)

この描写は避暑地に幻想的なイメージを与え、ふたりが自然に慣れ親しんでいることを示すだけでなく、陸と海の境界を読者に意識させるのではないだろうか。八月の大潮の時期に海の領域が拡大する様子が描かれているのだが、まるで海という自然の領域が人間の領域である土地を襲いにやってくるかのようなようである。この場面においてもまた、コレットが配置した空間の機能によって陸と海の対立を、人間の領域と自然の領域との対立として提示するのだ。『青い麦』の中に自然と人間の対立が存在するとき、それらの対立を扱った『ポールとヴィルジニー』を想起することができるのではないだろうか。というのも、『ポールとヴィルジニー』には実は、作者がルソーのすすめで着手し1784年に発表した『自然の研究』の四巻目として付け加えられた挿話であったという経緯があるからだ。この物語は楽園を

思わせるほどの自然に溢れ、島の中でも人の寄り付かない場所で兄弟のように成長する純真無垢な少年少女を描いた作品であるが、そもそも、『ポールとヴィルジニー』の出発点となる『自然の研究』の目的は、自然界のすばらしさを示すことによって神の存在と自然の摂理を証明しようという試みにあった¹⁵⁾。人間は自然に従って生きるべきであり、人間の幸福は自然との共存によって成り立つとベルナルダンはあるのである。したがって、神が幸福のために創り上げた「自然」に対して、社会を管理する「人間」は対立の関係にあるといえるだろう。これらの対立、そして『ポールとヴィルジニー』にみる、まるで図鑑のように多くの動植物が描かれる自然描写や、彼らを襲う嵐の描写を、コレットは『青い麦』の中で読者に反芻させるのである。

2-2. 異国趣味と悲恋

コレットが『青い麦』の中に取り込んだ『ポールとヴィルジニー』は恋愛小説として広汎な読者を獲得しただけでなく、その異国趣味や色彩感覚豊かな自然描写によってフランス文学に新たな境地をもたらした¹⁶⁾。この新たな試みもまた、多くの作家に影響を与えたのである。とりわけ、『青い麦』の中でそれらを体現するのは、女性主人公ヴァンカであるように思われる。では、それらの試みによってヴァンカはいかに描かれ、物語の中でいかに機能するのだろうか。

まず、物語の終盤、真夜中にふたりが別荘の外で落ち合う場面が挙げられるだろう。この場面ではフィリップがヴァンカを気遣い「冷えるよ」と声を掛けるのだが、するとヴァンカは、「大丈夫。青いキモノを着てきたから。」と答えるのである。この突然現れるキモノは、ヴァンカを流行に精通した女性として読み流すこともできるだろう。しかし、真夜中にフィリップの元へ訪れるためにわざわざキモノを着用するという描写は読者に文脈上の違和感を与え、物語の展開に必須のものではない。とくに、ヴァンカの神秘性についての言及や、彼女の意外な一面が多く語られるこの章では、青いキモノは読者に独特な印象を残すのである。

さらに、物語を通してヴァンカを観察するフィリップは、どのように彼

女を捉えているだろうか。以下に引用する描写は、来客をもてなすために普段より身なりを整えたヴァンカを目にしたときの独白である。

《なんだ、あれは》フィリップは声には出さずに呟いた。《まったく、どうしたんだよ、あいつ。おめかししたサルみたいじゃないか。まるで、聖体拝領に行く混血児みたいだ。》[…]

《タヒチの日曜日かよ。》とフィリップは心の中で嘲笑した。《こんなに見苦しいあいつ、見たことないぜ¹⁷⁾。》（下線は筆者による）

フィリップがヴァンカに対して投げかけるイメージは、都会とはかけ離れた素朴さ、そして異国情緒を思わせる。まだヴァンカを異性として意識しない彼にとって、彼女の性的魅力は異質なものとして映るのだ。特に、「混血児」という言葉は、シャトー・ブリアンの『アタラ』(Atala, 1801)を読者に想起させるのではないだろうか¹⁸⁾。ロマン主義文学の先駆者とも呼ばれるシャトー・ブリアンのこの作品は、アメリカの大自然を背景として展開される悲恋物語である。主人公ルネは、アメリカ原住民であり混血児のアタラと相愛の仲となるが、キリスト教徒であるアタラは純潔の誓いをたてていたために愛と誓いとの間で悩んだ末、死を選択するのである。『青い麦』において異質な存在感を放つヴァンカの「青いキモノ」や、異国情緒豊かな北米の大自然を舞台とする『アタラ』の暗示は、読者の中に抱かれる女性主人公ヴァンカのイメージを異国趣味へと誘導するのである。では、異国趣味と女性とを関係づけることにはどのような効果があるのだろうか。これについては、以下の小倉氏の言及が開示してくれる。

異国趣味はロマン主義文学の特徴だが、ヒロインの若い娘を異国の風土に配置することで、作家たちは文明や近代社会の力学に束縛されない、牧歌的でほとんどユートピア的な空間を創出しているようにみえる。そのため、若い娘の純潔さや無垢がいつそう際立つ、という効果もたらされている。女が青年に恋し、青年から愛され、しかし愛の悦楽を知ることなく、ときには愛の言葉さえ明瞭に口にすることなく

命が絶える、というのが三作に共通している。若い娘を中心に紡がれる愛の物語において、異国趣味と悲恋は相性がいいのだ¹⁹⁾。

ロマン主義文学において、異国で繰り広げられる恋愛物語の女性主人公は純真無垢さを強調されるだけでなく、常に悲恋と、すなわち「死」のイメージと結末に結びつけられてきた。アタラだけでなく『ポールとヴィルジニー』のヴィルジニーもまた、最終的に裸を晒す羞恥よりも死を自ら選択した女性である。女性は愛ゆえの死を期待されるのだ。たしかに、『青い麦』においても死に対する暗示を随所に見出すことができる。たとえば、語り手はふたりの恋について「命を落とすこともあるかもしれない」道だと説明するし、第5章「Drames 悲劇」でふたりが崖に腰かけている場面では、フィリップの肩にもたれかかっていたヴァンカは、わざと少しだけ海へと続く傾斜をすべり降りる。そんな彼女の行動を、フィリップは咄嗟に「死にたがっている」と解釈するのだ。このように物語全体を通して、語り手とフィリップの視点には、ヴァンカに結びつけられた死のイメージが含まれているのである。では、女性主人公ヴァンカは、彼女に課せられた悲劇を受け入れるのだろうか。その問いに対しては、彼女自身が物語の終盤で明らかにしている。

物語の終盤で、フィリップが前述の崖の上での出来事を取り上げ、彼女に「命を絶ったりしないと約束してほしい」と述べると、彼女は以下のように回答するのである。

「え。絶つ…命を絶つ。」[…]

「今。…死ぬ。…どうして。…」²⁰⁾

彼女が死にたがっていると信じて疑わなかったフィリップは、ヴァンカ自身によってはっきりと否定される。死に結びつけられた女性像の可能性は、女性主人公によって、彼女自身の言葉で打ち消されるのである。ここで注目には値するのは、女性主人公であるヴァンカに古典作品と同様の死のイメージを重ねていたのは、男性主人公フィリップであったという点だ。男性が

一方的に、異国情緒の中での恋愛を夢想し、悲恋を期待するような構図が伺えるのだ。しかし、『青い麦』においてヴァンカは、古典作品が生み出した型通りのストーリー展開と女性像を逸脱する。たしかに、『青い麦』は異国趣味を利用し、悲恋から導かれる死のイメージを読者に予感させる。しかし、作者コレットは悲劇を期待する男をフィリップに、古典作品を逸脱する女性をヴァンカに描いたといえるのではないだろうか。

2-3. 身体性を失う女性

前述したようにフィリップは、ロマン主義における悲恋のイメージをヴァンカに結びつけていた。彼は、ヴァンカの中に死を見出すのだ。しかし、一方で彼女の中にあえて見出さないものがある。それは彼女の性的魅力である。そのことは、ダルレー夫人との対比によって明らかになるだろう。フィリップはこのふたりの女性の間で揺れ動くのだが、ふたりは両極の存在だ。というのも、まさにダルレー夫人が快樂を伴う身体性を象徴するのに対して、ヴァンカは女性としての身体を否定されるからである。ふたりの女性が比較されることによって、フィリップはあえて、意識的にヴァンカの身体性を否定しているように思われるのだ。このような彼の態度から、19世紀的女性像のもうひとつの特徴を見出し、彼がヴァンカに投げかけるイメージを以下に検討していく。

19世紀前半のロマン主義の時代においてもっとも重要視されたのが、女性主人公の神聖さである。若い女性は自身の身体や快樂について決して語らず、純粹無垢であり続けることがヒロインになり得るための条件であったのだ。身体性よりも精神性を強調され求められた女性を、小倉氏は「天使的な存在」と言及している²¹⁾。この「神聖さ」の判断は当然、男性側から下されるわけだが、『青い麦』のフィリップもまたロマン主義文学の男性主人公と同様に、ヴァンカに対して純粹無垢であることを要求しているように思えてならない。たとえば、ヴァンカが、愛や快樂について「もう大人だから。わたしも知っているのよ」と語り掛ける。すると、フィリップは「知らないよ。君はなにも知らないんだ」と答える。彼はヴァンカに、快樂について語ることを禁じるのだ。そして、物語が進行するにつれて、ヴァ

ンカの持つ身体性への否定はさらに加速し、ついには彼女の身体性を打ち消してしまう。以下の引用は、真夜中にふたりが家の外で落ち合う場面である。

ヴァンカは姿を消してしまうと、まるでシルフ²²⁾のように戻ってきた。その足取りがあまりに軽やかだったので、フィルは、彼女より先に風が運んできた香りで彼女が戻ってきたのが判ったのだった。[…]

フィリップはヴァンカに対してちょっと穏やかすぎるし、軽やかすぎるし、優しすぎるのではないか。まるで霊みたいだと思った。すると不意に、この奇妙な陽気さがまるで墓から抜け出てきたものかのようになり、そしてこの常軌を逸した感じの良さは修道女の高笑いの中に鳴り響いているかのような印象が思い浮かんだ。「彼女の顔が見たいな」と彼は思った。そして彼は、実体のない声も、遊び好きの少女の言葉も、ひきつった顔から発せられたように思えてきて身震いした。切り立った岩の巣の中で衝突したときの、怒りと美しさで輝いていたあの引きつった顔から…²³⁾。

彼がヴァンカに抱く身体性の打消しは加速し、ついには彼女の姿を見失ってしまうのだ。しかし、この描写から浮かぶ印象は、古典作品にみるような妖精のように美しい「神聖な」女性というよりも、もはや人間ではない霊的なイメージではないだろうか。この少し前でも、ヴァンカの声は彼女のものでも、どんな女の声でもないような印象を彼に与える。ヴァンカから発せられているはずの声は、もはやどこから聞こえてくるのかわからなくなり、フィリップは恐怖の念すら覚えるのである。

この場面にみる霊的なイメージが想起させる、神聖さよりも畏怖に近い印象は、まるで三大バレエのうちのひとつであるロマンチックバレエ「ジゼル」²⁴⁾のようではないだろうか。ジゼルは恋に落ちた相手アルブレヒトの嘘と裏切りによって、あまりに傷つきすぎたために命を落とす。そしてフィリップもまた、ダルレー夫人との密会を隠し通し、ヴァンカを騙そうと試みる。さらに、ジゼルは絶命したあと、通りすがりの人間や裏切った男を

死ぬまで踊らせる精霊ウィリー²⁵⁾たちの仲間になる。このウィリーたちが、ジゼルの墓を訪れた男たちを襲う場面が見所なのだが、ヴァンカに与えられる「墓から抜け出てきた者」というイメージは、まさにこの場面に酷似するのである。この裏切りのシチュエーションと霊として現れる女性の相似から、『青い麦』において身体を剥奪されたヴァンカの霊性と畏怖の念がよりいっそう高まるのだ。フィリップはロマン主義文学の男性主人公と同様に、ヴァンカに快樂について語ることを禁じ、彼女から身体性を剥奪した。それは彼にとってのヴァンカの「神聖さ」を全うするためであっただろう。しかし、身体性の否定によって得られた彼女のイメージは、彼の予想を超え、畏怖のイメージとなって表れるのである。

3. 『青い麦』にみるキャリアの目覚め

これまで考察してきたように、『青い麦』には自然描写や人物の役割、女性像の中に、さまざまな古典作品が投影されている。とりわけ、『ダフニスとクロエー』と『ポールとヴィルジニー』は物語の構成に強い影響を与えていることがわかる。さらに、この二作品と『青い麦』の主人公たちが幼馴染みであるというだけでなく、両親との関係性が類似している点を指摘したい。まず、『ダフニスとクロエー』の主人公のふたりは山羊飼いと羊飼いの子どもとして登場するが、実は両親だと思ってきた人物は里親で、はじめふたりは捨て子であった。次に、『ポールとヴィルジニー』では、主人公の少年少女は父親を持たない子どもである。彼らの母親は恋人に捨てられた女性と、夫に先立たれた未亡人として描かれ、ふたりは男女のうち片方の親だけを持つのである。そして、『青い麦』においてフィリップとヴァンカの両親は、「影たち」として登場する。彼らの両親は物語にも登場するにも関わらず、「ほとんど存在しない、家族の集まりというぼんやりとした影たち les pâles Ombres, à peines présentes, du cercle de famille」と呼ばれ、実体のない存在として扱われるのだ。この三作品は、実質的な両親の不在という点で共通しているのである。実際にフィリップの両親は、彼に対してほとんど影響力を持たないようだ²⁶⁾。たとえばフィリップは、家族たちがふ

たりの結婚について冗談を交えながら会話をしているのを耳にすると、「この人（父）は、可哀そうに、一度も恋に落ちたことがないんだ…」と心の中でつぶやく。そして第16章で父親と散歩をする場面では、彼がフィリップの結婚や将来の仕事、いつか別荘を譲ろうと考えていることなどを話しているのに対して、「なんてあまりに単純で、無邪気なんだ」と心の中で呆れた態度を見せるのである。彼にとって父親は、教訓や人生の重要な事柄を乗り越えるための術を示してくれる存在ではない。両親たちは、彼がこれから歩むべき人生のモデルにはなり得ないのである。ではフィリップは何を手本にするのだろうか。この物語の主題となるヴァンカとの恋は、何をモデルに進められるのだろうか。それについては、以下の語り手の言葉が明らかにしてくれる。

これまで彼が思いのままに読んできたどんな本も […] このようなありふれた難破によって誰かが命を落とさなければならないということしか教えてはくれなかった。どの小説も、性愛に行きつくまでには百ページ、あるいはそれ以上を費やすのに、その肝心な結末自体は十五行で終わってしまうのだ。

フィリップは記憶をたどって探した。若い男がただ一度の過ちで幼年時代や純潔から解放されるのではなく、深い揺れによって地震のように、長い日々わたってぐらつき続けるという内容の本を探したが、むなしくも見つけることは出来なかった…²⁷⁾

フィリップにとって恋の手引きとなるのはこれまで読んできた小説であり、彼は物語の中から、進むべき「型」を探すのだ。まさに「難破によって命を落とす」物語とは、海の中で引き起こされるヴィルジニーの死によって完結する『ポールとヴィルジニー』を指しているのだろう。しかしフィリップは、『ダフニスとクロエ』のダフニスと同じように性愛の伝道師から快楽を教わることはできても、快楽というひとつの結末に到達してしまったあとには、主人公としての振る舞いや心情を物語の中に見出すことはできない。なぜなら、古典作品が、結婚や死という一定の結末に収束すること

が約束されているのに対して、フィリップとヴァンカの日常は決して収束することはないからだ。このことから、『青い麦』がたしかに古典作品をモデルにしているとしても、そこには、コレットが主人公たちに与えた決定的な相違を見出すことができる。それが、フィリップとヴァンカが、現代社会を生きる少年少女として描かれている点だ。ふたりは夏が終わればこの異世界のような避暑地から再びパリの日常に戻り、フィリップはダルレー夫人との関係を継続するか否かの選択を迫られるだろう。『青い麦』において作者コレットは、古典作品に描かれることのなかった将来の選択、すなわちキャリアの選択を主人公たちに提示し続けるのである。

以上のことから、『青い麦』は思春期にある少年少女の愛と性愛の目覚めを物語ると同時に、彼らのキャリアの目覚めを描いた作品であるといえるだろう。『ダフニスとクロエー』は外的困難や身分の違いに見舞われながらも、最終的には実親の登場によってそれらの問題は解決される。運命の力によって、愛ゆえの結婚、身分、経済的な豊かさを手に入れた主人公たちにとってキャリアの形成は必要性を失うのだ。さらに、『ポールとヴィルジニー』においても、物語が女性主人公の死という結末に収束することによって、少年少女はキャリアを育む意味を失う。むしろヴィルジニーがあのままフランスに留まることでキャリアを築こうとすれば、悲恋の物語は成り立たないのだ。作者によって与えられた運命的な展開が彼らのキャリアの選択を剥奪するのである。しかし、『青い麦』において、運命による収束は許されない。19世紀の一般男性が求めた社会的・職業的成功に関心を示さず、古典作品から愛の方法を模索するフィリップに対して、「影たち」と呼ばれた彼の父親は、ヴァンカとの結婚は起り得ると同じくらい起り得ないことだと述べる。彼は、自らの父親によって運命を否定されるのだ。そして、ヴァンカ²⁸⁾は将来について無関心な彼を「詩的」だとからかい、語り手は彼を「ロマン主義文学のよう」と揶揄するのである。作者コレットは、伝統的な文学作品の型をもっともよく象徴する男性主人公フィリップを揶揄の対象とし、彼に生じる問題と揺れ動く心理を緻密に描写する。そのことによって、読者は『青い麦』の中に、コレットによって古典作品から現代社会へと書き換えられた少年少女を見出すことができるのではない

だろうか。

おわりに

コレットが1923年に発表した『青い麦』は、しばしば自伝的な作品として取り上げられてきたが、実はさまざまな古典作品を土台としていることが明らかになった。物語の枠組みや、豊かな自然描写、女性表象が『ダフニスとクロエー』、そして『ポールとヴィルジニー』のそれらと類似する点が多くみられるのである。フィリップは、ダルレー夫人に性愛の伝道師の役割とファム・ファタル的な女性を見出す。そして、ヴァンカに対しては、『アタラ』やロマンティック・バレエ「ジゼル」を暗示することで、悲恋から導かれる死のイメージと純粹無垢で神聖な女性といった、いかにも19世紀的な女性を期待するのである。しかし、コレットはフィリップが抱く女性像を裏切ることによって、古典的な女性像とお決まりの結末から逸脱する女性を読者に提示している。ヴァンカは死のイメージを否定し、身体の剥奪によって畏怖の感情を抱かせるのだ。

そして、フィリップが古典作品をもっともよく象徴する人物として描かれることで明らかになるのは、『青い麦』と古典作品の決定的な相違となるキャリアの問題だ。古典作品が運命による愛の結実、あるいは運命による悲恋へと収束して物語が幕を閉じるのに対し、『青い麦』において物語の収束は許されないのである。実際に、フィリップは知り得なかったヴァンカの一面を次々に発見し、ダルレー夫人とのパリでの再会を暗示される。そして、ヴァンカは結婚のために絵の勉強や商才を諦め、よい母親になるための道を選ぶことからわかるだろう。『青い麦』の物語は決して子どものまま終わらず、主人公たちは大人へと成長するためのさまざまな将来の選択を迫られるのである。

このように、『青い麦』は伝統的な文学・芸術作品という土台の上に、思春期の少年少女の性の目覚め、そしてひとりの人間のキャリアの目覚めを描いた作品である。古典作品を模倣しながらも、作家コレットはその枠組みの中に収まらない。コレットは『青い麦』の中に、運命や古典的な型に

縛られず、迷い葛藤しながら現代社会を生きる少年少女を見事に描いたといえるだろう。

注

本稿における『青い麦』のテキストは、1960年から1966年にかけて刊行された *œuvres de Colette* の第二巻に収録される *le blé en herbe* を使用した。邦訳については、河野万里子訳（光文社、2010年）を参照しつつ、筆者が作成した。

- 1) 主な名誉として、レジオンドヌール・シュヴァリエ（1920年）、ベルギー王立アカデミー（1935年）、アカデミー・ゴンクール総裁（1945年）、レジオンドヌール・グラントフィシエ（1953年）などが挙げられる。
- 2) 『青い麦』は当初、1922年7月から1923年3月にかけてル・マタン誌に週1回掲載された連載小説であった。新聞掲載時には各回が独立した断章として執筆され、それぞれの章には題名が付けられていた。小説出版時に、もとの全ページのうちおよそ半分、あるいはそれ以上にあたる1章から15章を抜粋し、そこに大幅な加筆を施し、物語の続きと結末を書き足した。また、それと同時に各章の題名は削除されてしまった。削除された題名を見直すとき、フィリップとダルレー夫人の出会いの場面である第4章には「ダフニス Daphnis」という題が付けられていた。さらに、続く第5章「悲劇 Drames」の中には、フィリップとダフニスとの比較が語り手によって行われている。このダフニスとは、2世紀末から3世紀初め頃の古代ギリシアで、ロンゴスによって書かれた『ダフニスとクロエー』に由来している。レスボス島にあるミュティレーネー近郊の農場地帯を舞台にした牧歌的な小説で、孤児として登場する幼馴染みの主人公ダフニスとクロエーが初めての愛に戸惑いながら、さらには多くの外因的困難を乗り越え、最終的に結ばれるという物語である。
- 3) ハーバート・ロットマン、工藤庸子訳、『コレット』、1992、東京、中央公論社、p. 282-294.
- 4) Colette, *le blé en herbe, œuvres de Colette*, 1960-1966, Paris, Flammarion, p. 248.
- 5) *Ibid.* p. 244.
- 6) 若い男性主人公の身体反応については、筆者論文「コレット小説にみる子どもの特権と思春期—『青い麦』から『ジジ』まで」（『AZUR』、23号、成城大学フランス語フランス文化研究会、2022年3月、掲載予定）を参照されたい。

- 7) *Ibid.* p. 259.
- 8) *Ibid.* p. 261.
- 9) *Ibid.*
- 10) Martine Charreyre, *Théâtraliser l'écriture romanesque*, L'Herne, 2011, p. 291-299.
- 11) *Ibid.*
- 12) *Le blé en herbe*, p. 287.
- 13) たとえば、主人公のヴァンカという名前は「ツルニチニチソウ pervenche」という意味を持っているし、彼女の瞳はツルニチニチソウと同じように青い。さらに、自然界の生物は1章「エビ crevette」や、9章「アザミ les charçons」にみるように、各章の題名にも用いられている。このアザミもまた、ヴァンカの瞳に喩えられるのだが、別の場面ではダルレー夫人への贈り物としても登場する。そして、フィリップとダルレー夫人の関係を生み出すきっかけとなった「カイソウトリ」は、「ヒバマタ海藻 goémon」というあまり馴染みのないものである。また、『ダフニスとクロエー』のクロエーは「青々とした」あるいは「若葉」の意味がある。
- 14) *Ibid.* p. 246.
- 15) ベルナルダン・ド・サン＝ピエール、鈴木雅生訳、『ポールとヴィルジニー』、2014、光文社
- 16) 前掲書
- 17) *Le blé en herbe*, p. 237.
- 18) 『アタラ』もまた、『ポールとヴィルジニー』からの触発によって描かれた作品である。シャトーブリアンは新大陸アメリカの大自然を舞台に『アタラ』を描き、ヨーロッパからやって来た青年がその土地の老人から悲恋物語を聞くという枠組みにも表れている。
- 19) 小倉孝誠、「天使的な娘からギャルソンヌへ：若い娘たちの表象と現実」女性学研究、2020、27号、p. 63-88.
- 20) *Le blé en herbe*, p. 292.
- 21) 小倉孝誠、「天使的な娘からギャルソンヌへ：若い女性たちの表象と現実」、女性学研究、2020、27号、p. 63-88. 19世紀に出版された多くの礼儀作法書にみられるように、女性が身体について語ることはタブー視されていた。顔や手などの露出している部分でさえ、直接的な表現は避けられたのである。たしかに、19世紀を代表する女性作家ジョルジュ・サンドは、結婚制度や貧しさなどの社会的差別を主題に多くの作品を描いたが、女性登場人物が身体や快樂について言及することはほとんどない。
- 22) 「シルフ sylphe」とは男の超自然的存在で、ケルトとゲルマンの信仰によれば、目に見えない世界を支配している。小悪魔 lutin と妖精 fée の中間の存在。(引用：ラルース大辞典) また、一説によれば、四大精霊のうち風を司

る精で、姿を現すときにはほっそりした優美な人間の少女に似ている。

- 23) *Le blé en herbe*, p. 302.
- 24) 1841年にフランスで初演されたバレエ作品で、全2幕からなる。作曲はアドルフ・アダン、振付はジャン・コラーリとジュール・ペローによって創られた。
- 25) ここは結婚を前に亡くなった処女の精霊・ウィリーたちが集まる場所である。ウィリーは若い娘の姿をして現れる。
- 26) 「ヴァンカとフィリップは礼儀正しく微笑み、彼らの傍でトランプや刺繍に興じる大人たちをぼんやりとした存在として再び追放した。それでもまた、応用電気や機械工学に才能があるフィリップの《天職》やヴァンカの結婚といったお馴染みの話題についての冗談が交わされているのが、まるで水のざわめきのように向こう側から、彼らの耳に聞こえてくるのだった。」フィリップとヴァンカにとって将来の話を持ち出す大人たちは「ぼんやりとした存在」でしかなく、ふたりは自分たちの世界から彼らを閉め出してしまう。自分の天職やバカンスが終わればすぐに始まるであろう勉強は、フィリップにとって他人事であり、未だ響かないものなのだろう。
- 27) *Ibid.* p. 283.
- 28) ヴァンカは結婚を将来の選択として選び、絵の勉強や商才を諦める。

